



## 永井博先生を悼む 永井博 回想記

著者	永井 淑子
雑誌名	筑波哲学
号	22
ページ	1-3
発行年	2014-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00122488">http://hdl.handle.net/2241/00122488</a>

# 永井 博 回想記

永井 淑子

亡夫、永井博は、大正十年一月一日、愛知県の蒲郡に生まれました。幼少時代はヤンチャで周囲の人を困らせたと聞いています。

少年時代の夏は、下校すると先ず海に遊び、時には海月に刺され、痛い目にあったようです。朝は早起きして、かぶと虫を採りに木登りをし、或る時は木から落ちて死ぬかと思ったそうです。夏以外も殆ど屋外で遊び、各家の電燈が一斉に灯る直前まで友達と遊び、家の門限に帰れなかった時は、たいそう叱られたと聞いております。又当時、少年の間で人気のあった連載小説「アジアの曙」に夢中になり、本屋さんの入荷を待ち構えているような少年であったようです。父の舜次は教育熱心で本の購入には惜し気なかったそうです。しかし昭和二十年の空襲で全部消失してしまいました。又、批判しながらも尊敬していた父は、日常の健康と栄養に気を配り、特に岡崎八丁味噌の効用には強い関心をもっていた様です。亡夫はこの味噌汁を飲んで育ちました。私も結婚しましてから今日に至るまでこれを飲み、孫達も好んで飲んでおります。

東京文理科大学（旧制）哲学科を繰り上げ卒業し、海軍予備学生として横須賀久里浜の海軍対戦学校に入隊、八ヶ月の訓練を受けました。この訓練の凄まじさは筆舌に尽くし難く、腕一本失っても娑婆に帰りたいかと回想しておりました。務台理作先生、下村寅太郎先生とは、軍の検閲を受け乍らも文通させていたゞきました。五銭葉書のそれは今なお主なき机の引き出しに残っております。復員しましてからは、文理大で副手、助手を務めました。その頃は、今では想像もつかない戦後の貧しさでしたから、下宿して食べるだけで精一杯、その中で学問を志すことは生半可の努力ではなかったと思います。

先生方に恵まれ、先輩、同輩、後輩の皆様方にも恵まれましたからこそ、初心を貫けたのではなかったかと思っております。

東京教育大学に勤務しておりました昭和二十九年、私共は結婚いたしました。その披露宴で、務台、下村両先生から卒論の出来についてたいへん高い評価をいただきま

した。

田辺元先生には、亡夫の処女出版であります『ライブニッツ研究』を謹呈させて頂きました折、大変長文の書簡を頂戴いたしました事、どれ程うれしく、どれ程励みになりましたことか・・・今日ではその書簡も色褪せましたが、それはそれは大切に上記の先生方の葉書と同様に、机の引き出しに残したまゝ逝きました。書籍『現代自然哲学の研究』では、第一回田辺元賞を頂戴いたしました。

昭和四十四年頃は、学生運動が何彼と激しく、研究室に入れなかった事もあり、その上学生から説教されたとも聞いております。

昭和五十年から約三年間は、教育大学と筑波大学とを併任しておりました。

筑波大学に身を置きましてからは、その運営に苦勞が多く、ひどい円形脱毛に悩み、血圧も高く、診療所のお世話になりました。

その頃は、東大通りの吾妻四丁目交差点近くの公務員宿舎で週に三、四日宿泊した後、帰宅の途についたものでした。そして常磐線土浦駅では、いつも何方かにお会いし、車中で雑談している間に上野駅に到着していたようです。帰宅後、車中での話題をふっと思い出しては、何彼と話してくれたものでした。

昭和五十九年三月筑波大学を定年退官し、四月から東海大学教授に就任、文明研究所に勤務いたしました。健康に恵まれ、十年間、一度も休講した事はなかったと記憶しております。

しかし退職後間もなく右脚を痛めて暫く通院いたしました。翌年今度は心筋梗塞を起こしました。しかし手当が早かった為大事に至らず、その後は元気で過ごしました。

平成八年、日本学士院会員になりました。「カントとニュートン—哲学と科学との分離について—」（日本学士院紀要）、又複数回の論文報告をしましたが、体調がすぐれませんでしたので常に私は亡夫の身边に附いておりました。亡夫にとりましては安心の一方、うとうししかったかもしれません。月に一度の定例会議には、会議その他が終わるまで、私は上野公園や周辺を散策しながら亡夫を待っておりました。

遡って昭和二十四年頃（文理大助手）から下村先生の将来の後任として長野県の由緒ある上伊那哲学会・下伊那哲学会の講習会に携わり、以来半世紀以上、同哲学会の会員の熱意に応え、年二回～三回程、定期講演をさせていただいておりました。しかし老年令になりました事から、今は若い方に道を譲りました。現在も、両哲学会は勿

論立派に存続しております。

平成二十四年十一月七日、自宅で眠るがごとく生を了えました。葬儀は遺言通り、ドヴォルザークの交響曲「新世界」に送られ、近親者のみで静かに執り行われました。

拙い回想文を綴っております間、ずっと亡夫が側に居るような錯覚に捕らわれました。結婚生活五十八年、信じられない歳月の早さでした。

末筆になりましたが、多くの方々にお世話になりました歳月、亡き夫に代わりまして幾重にも御礼申し上げます。

故永井博、妻永井淑子